

ありのまゝ

泉鏡花作

全一章

つれ／＼なるまゝに日ぐらし硯に向ひて書いたる
にもあらず、炬燵に寝ころびながらうつら／＼とし
て考へた句にもあらず、廊下をあつちこつち歩きな
がら即吟したるものにもあらず、思ふたことやら、
見たことやら、感じたことやら、ありのまゝなり。

背戸の小松門の大松翠なり

大塚に住むと、こんなこともいひたくなる。

松立てゝ竹立てゝ人の臆たけし

なにがしのもとに

元朝を傾城いまだ年あけず

別に仔細のあるにはあらず、伯父さんも叔母さん
も、御心配には及ばぬなり。

初手水蟲齒の痛き我起きたり

此時酒亭に句あり

兄上よ若水は我汲み候はむ

甚六顔をしかめながら苦笑して曰く

若水や君が紅の玉だすき

酒亭まないはく

父母いませず兄と弟と雑煮くふ

あまり色氣がないなト甚六歎息す、酒亭再び

妹が手に太箸太く見ゆるかな

うそをつくぜ（實景）

明樽や古竹皮や露地の春

これでも遠くの方に琴の音がするからいゝ。

鳥追の手をひかれたる盲目哉

こりや御相談になりさうもない、それぢやあこれ

では何うですト酒亭曰く

黄昏るゝ戸に鳥追の腕白し

新年は幾つぐらゐだらう、十八九トまたいゝ加減
なはなしなり。

正月を墨ぬられたり妹が顔

酒亭

七草雨の日

七草の朝から雨となりにけり

むかし人、「兩國橋にてほとゝぎすを聞く」と前
書して

兩國の上で聞きけりほとゝぎす

なる句あり、誰だか知らぬがこの七草とは従兄弟
同士ぐらゐなもの

あまり固くるしければとて、
おいでなさ
りいせんから肥りいした

【完】